法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

ニーチェの真理論（一）ー初期の一遺稿における一

池田，俊彦

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要
(巻 / Volume)
86
(開始ページ / Start Page)
25
(終了ページ / End Page)
40
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003590

Hosei University Repository

ニーチェの真理論（一）

――初期の一遺稿における――

池田俊彦

一

ニーチェは率直かつ明快に、「神は死んだ」と断言する。あれほどまでにキリスト教が深く根を張ってきた西欧世界において、彼は果敢に「神は死んだ」と言い放つ。彼以前に近代の多くの哲学者たちが、彼らの神についての考えによって、教会や国家から制約を受けてきた。それにもかかわらず、彼がこのように率直かつ明快に断言しえたことに、西欧世界でのキリスト教の衰退を見ることができる、とも言える。

彼の「神は死んだ」という言葉は、しかし、「神はもともと存在しない」ということと、端的に同一なのではない。「神がどこへ行ったのか？　それを私がお前たちに言ってやろう。われわれが神を殺したのだ。お前たちと私とがだ。われわれはみんな、神の殺害者なのだ。」[1] 彼の「神は死んだ」という言葉は、近代人が「神を殺してしまった」ことを意味している。西欧のキリスト教の神への表面上の信仰の深部で、神の否定という出来事が起っていたことを意味している。それまで彼岸に、神的なものに、向けられていた誠実さが、近代においては此岸に、自然と人間そのものに、向けられるようになった。この誠実さの遂行こそ、神を殺害するものであったことを意味している。だからその言葉には、西欧の歴史のうちに身をおく者の、西欧の歴史に対する一つの主体的な態度が語られ

Hosei University Repository

ている。がしかし、近代の最大の出来事としてのそうした神の死に、白昼にランプに火をともして市場へと駆ける狂人以外気づいていない、とされる。

しかしまた、「神は死んだ」とニーチェが言うときの「神」は、キリスト教の神だけを指しているのではない。すなわち、彼がキリスト教と言うとき、聖書を通じてのキリスト教だけが考えられているのではない。そうではなく、キリスト教は「大衆向けのプラトン主義」と言われ、プラトン以来のギリシア的形而上学と結びついたキリスト教のことが、考えられている。だから彼が「神は死んだ」と言うとき、それは単に、西欧の近代だけの問題が言われているのではない。そうではなく、プラトン以来の西欧の形而上学思惟の歴史全体が、問題なのである。

プラトンでは、現実の感覚的世界を超えたところに、超感覚的なイデアの世界が構想された。しかも、この超感覚的なイデアの世界こそが真なる存在の世界であり、感覚的な生成と変化の世界は虚偽の世界、見せかけの世界である、とされた。ニーチェはこのように、現象の背後にある不変不動の実体的世界こそが真実の存在で、しかも理性による知の対象であり、感覚的な生成し変化する現象の世界は虚偽の世界である、とみなす思惟の形態を形而上学とする。しかも西欧の思惟において、このような形而上学的実体論が、キリスト教と結びついた。神的なものが超感覚的彼岸であり、この世は感覚的仮象の此岸であるとされ、真の世界である彼岸と虚偽の世界である此岸とが、対立された。こうした思惟の形態は、それまで彼岸に、神的なものに向けられていた誠実さが、此岸に、自然と人間そのものに向けられるようになったとき、捨てられたはずだった。しかし、近代的思惟のうちにも世俗化された形で、そのように二つの世界を対立させる形而上学的思惟が残った。理想、良心、理性、最大多数の最大幸福、等々。これら完全には到達しえない範型が定立されて、真実のものとされ、これらの範型に対して真ではない現実が、否定的なものとして扱われる。現実が依然として否定的な真ではない世界とされ、真実の世界と対立される。プラトン主義的キリスト教が、形而上学的思惟が、いまだに「巨大なぞっとするような影」をとどめている。そこでこうしたプラトン主義が、逆転されなくてはならない。形而上学的思惟が否定され、克服されなくてはならない。

これが「神は死んだ」ということであり、同時にこれは、形而上学的思惟の拒否を意味する。同時にこれはまた、

Hosei University Repository

これまで価値ありとされていたものが、すべて無価値・無意味となることを意味する。これまで価値ありとされていたものの虚偽性が暴露され、すべての至高の価値が価値を喪失すること、すなわちニヒリズムを意味する。いまや結局、すべての価値は無（ニヒル）によってしか支えられていないことが、明らかとなる。すべてのものが支えがなく、無の中に投げ出されている。この無を埋めることはできない。すなわち、形而上学的思惟に立ち戻り、超感覚的世界を外に立て、それによって支えることは、もはやできない。もはや何の支えもなく、無によってしか支えられていないことを、われわれは受けとめなくてはならない。「かくあった」は、転がすことのできない岩、意志にとっての歯ぎしりでしかない。しかしそれを受けとめ、と同時に、もはや外からは支えられも動かされもしない輪を、自ら回すのでなくてはならない。こうしたニヒリズム克服の思想として、と同時に、形而上学的思惟克服の思想として、晩年のニーチェにおいて「権力への意志」の思想が結実してくる。

ニーチェはこのように、ニヒリズムおよび権力への意志の思想に至る。しかしこのため、それに至る過程で、形而上学的思惟の立てる諸々の原理に対して、諸々の至高の価値に対して、背後にまわってその虚偽性を、欺瞞性を、暴き出す。こうして、諸々の至高の価値の喪失を、無価値化を、白日のもとに曝そうとする。しかもそうしたものの一つとして、純粋な認識、無垢の認識、つまり真理の問題についても、やはり決して例外ではなかった。「われわれが真理を欲するにしても、だが何故にむしろ、われわれは非真理を欲しないのか？　また、不確実性を？　無知をさえ？　真理の価値の問題が、われわれの前に歩み出てきた。それとも、この問題の前に歩み出たのは、われわれの方だったのか？」[2] これは彼の後期に書かれた言葉だが、しかし彼は、ニヒリズムおよび権力への意志の思想に至るずっと以前の初期の段階から、真理とは何か、つまり真理の意味するところについて、思索を加えている。そこで以下では、ニーチェのその真理についての思索に検討を加えてみたい。

Hosei University Repository

二

真理ないし認識についてのニーチェの思索は、彼の著作の中でまとまった形で残されているわけでは決してない。中期以降、彼の著作が断章の形式で書かれるようになったことにもよるが、それらのうちの幾つかの断章と、かつ一八八〇年代の遺された断片のうちに、散らばった形で、その思索は展開されている。とくに、一八八〇年代の遺された断片のうちで、権力への意志の思想からして論じられているものに、重要なものが見いだされる。しかしいま述べたように、この真理および認識の問題の思索については、彼の初期に、未完に終り公刊されなかったが、一つの短い論文が残されている。そこで、後期の重要な彼のその思索に触れる前に、初期のこの論文に見られる彼の思索を検討しておきたいと思う。というのも、晩年に権力への意志の思想からして徹底した形で追究されるその思索が、この論文では萌芽的に予示されて、というよりもむしろかなり先取りされた形で、しかもまたある程度まとまった形で、論じられているからである。

ここでまず取りあげるその論文は、『道徳以外の意味における真理と虚偽について』(Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne) と題されている。この原稿は、一八七三年六月に書かれた。といっても、ニーチェはまさにこの一八七三年以来切れ目なしにどこかが病気で、同年四月にはまず眼疾が進み、視力が急激に衰えた。このため、同時期以降に書かれた『反時代的考察』と同様に、この論文の原稿は、ゲルスドルフに口授されて筆記された。ただし、その草稿はもっと前に断続的に残されていて、前年の早い時期にも見られるとされる。またシュレヒタによれば、前年の五月末に最初の草稿が書かれていた、ともされる。

前年の一八七二年一月には、『悲劇の誕生』が出版されていた。この書への後年の序言によれば、この書は、「学問を芸術家の光学のもとに見、さらに、芸術を生の光学のもとに見る」[3]のであり、生を根源的に凝視したうえで、学問よりも芸術が根底的なものと見なされて、ギリシア悲劇の誕生が解明された。すなわち、アポロ的なものとデ

Hosei University Repository

ィオニュソス的なものとの不断の抗争と和解が、ギリシア芸術の発展であり、その最高の勝利がアッティカ悲劇である。アポロ的なものとは、夢において経験されるような、物事に光、形、明確さ、秩序、個別性を与え、明晰で節度あるもの、美しい仮象を生み出す原理であり、美しい節度溢れる仮象を夢見ることによって、生の苦悩を克服しようとする。ディオニュソス的なものとは、陶酔において経験されるような、個の世界を没却し、秩序づけられた明かるい世界の背後の混沌たる根源的一者への合一を求める原理であり、節度や限界や個体を破壊して、生の根底に潜む苦悩と歓喜の永遠の根源的一者との融合を達成しようとする。ギリシア悲劇は、音楽芸術の精神であるこのディオニュソス的なものを根源とするコロスの歌舞から発生し、それがアポロ的なものと見事に結合することにおいて誕生した、とされる。ニーチェのこの解明は、アポロ的なものとディオニュソス的なものとの二元的図式から捉えられているが、しかしここで重要なことは、彼があくまでもディオニュソス的なものを、ギリシア悲劇誕生のより根源的な原理と考えていた、のみならず、生のより根源的な原理と考えていた、という点である。

ところで、この『悲劇の誕生』が出版されたあと、翌一八七三年の八月に、『反時代的考察』の第一部が出版された。これは、彼がまだ『悲劇の誕生』の精神圏内にあることを濃厚に示しているが、ともかくそこでは、ダーフィト・シュトラウスを論じて「教養俗物」が批判される。以降第四部まで出されるこの『反時代的考察』では、ニーチェが『悲劇の誕生』以前から心に抱いていた時代批判の思索が、順次展開されていく。いまこれから扱う論文は、公刊されたこの両著作の間に書かれたものだが、公刊された著作の裏面で、ニーチェの関心が奈辺にあったかをうかがわせる。

三

この小論文を検討してみよう。それはまず第一に、人間の知性（Intellekt）に対する一八世紀の啓蒙主義的なオプティミスティックな確固たる信頼に反対して、その高慢な信頼を打ち砕くことから始まる。冒頭一つの寓話によ

Hosei University Repository

って、知性による認識の発明は、世界史のもっとも誇り高い瞬間でもあれば、また同時にもっとも欺瞞に満ちた瞬間でもあった、とされる。(S.369)[4] もちろんニーチェは、知性を全面的に否定するわけではない。しかし、人間の知性が「いかに惨めで、影のように不確かで、束の間のはかないものに見えるか、またいかに無目的で、身勝手なものに見えるか」(ibid.) を強調する。しかしこの強調も、人間の生 (Leben) のうちにそれを位置づけるためのものである。すなわち、ここでもニーチェは明らかに、生の光学のもとに知性を見ている。だから、「人間の知性にとっては、およそ人間の生を超えてそこから先へ導くような使命などは、存在しない」(ibid.) とされ、また、知性は「何と言っても補助手段として、不幸きわまりない、繊細このうえもない、無常はかない存在者たちに、ほんの添えられているにすぎないのであって、それも彼らを一瞬間生存につなぎとめておくためなのである」(S.370) とされる。このように、知性を、認識を、生の手段とする考えが、ニーチェにおいて初めから明確に表われている。

ところでこのように、知性も生の視点のもとにその補助手段と見なされるが、このためさらに、知性は個体保存の手段である、という点から捉えられている。(ibid.) しかも、「個体保存のための手段としての知性は、その主たる力を偽装 (Verstellung) において発揮する」(ibid.) というのが、知性の使用についてのニーチェの捉え方である。それというのも、人間にあっては欺瞞が、おべっかが、嘘と誤魔化しが、ひそひそ話が、体面保持が、借りものの光輝をまとって生きることが、仮面をかぶっていることが、真相を覆い隠す因襲が、他人や自分自身に対するお芝居が、要するに絶え間のない虚栄こそが、お定まりの通常のあり方だからである、と彼はする。(ibid.) 例えばここにすでに、「仮面をかぶっていること」(Maskirtsein) という言葉が出てくる。外見に欺かれることなく、そのかぶっている仮面をはいで、その見えていなかった所を見抜く、といった暴露的な手法こそ、彼の哲学者としてのやり方だった。がこのことは同時に、すべて深みをもつものは表面と仮面とを愛する、という認識と一体となっている。すでに『悲劇の誕生』にしてからが、アポロ的なものという仮象の、つまり仮面の、その根源にあるディオニュソス的なものを抉り出すことが、主題だった。彼はのちに、自分自身の仮面についてこう語っている。「深いものはすべて、仮面を愛する。何にもまして深い事物は、形象や比喩に対して憎悪をさえ抱く。正反対のものにし

Hosei University Repository

て初めて、神の羞恥がまとって歩くのに、最適の仮装ではないだろうか？……本能から、沈黙し黙秘するために語ることを用い、限りなく伝達を回避しようとする隠栖者は、仮面が自分の代わりに友人たちの心や頭の中を歩きまわることを欲し、またそれを促す。そして、彼がそれを欲しないとしても、いつか彼の眼が開けて、それでもそこには彼の仮面があるのであり、またそれでよいのだ、ということを悟るだろう。あらゆる深い精神は、仮面を必要とする。そればかりでなく、あらゆる深い精神のまわりには、たえず仮面が生ずる。彼の与えるそれぞれの言葉が、それぞれの足どりが、それぞれの気息が、つねに間違って、つまり浅薄に、解釈されるおかげで。[5]」彼は仮面をはぎ、現象の根底にあるものを暴露的にあばき出す、と同時に、自身の表現において仮面を必要とした。そうした彼のあり方が、さきの彼の言葉にも含まれている。ともかく、知性の主たる力についての基本テーゼは、彼によればこうである。すなわち、「個体が他の諸々の個体に対して自己を保全しようとしているかぎり、事物の自然な状態からいって、個体はたいていは知性を偽装のために利用したにすぎなかった。」(S.371)

ではそうした状態からして、真理を誠実に純粋に目ざす衝動は、どのように生じえたのか。ニーチェはこう解釈する。「しかし、人間は必要に迫られてか、また退屈しのぎによってか、社会的に群をなして生存しようと欲するものだから、何らかの平和条約の締結を必要とする。そして、このうえなく殺風景な「万人に対する万人の戦い」を、少なくとも自分の世界からは消し去ろうと、努力する。ところで、この平和条約の締結こそは必然的に、あの謎と思われている真理衝動の獲得への第一歩のように見えるものを、伴っている。すなわち、今後「真理」であるべきとされるものが、いまや固定されるのである。換言すれば、事物について均一に妥当しかつ拘束力をもつといった表示が考案され、言葉の立法によって真理の最初の諸法則もまた告示される。なぜなら、ここにおいて初めて、真理と虚偽との対照が成立するからである。」(ibid.) このようにニーチェは、真理を「誠実に、純粋に」目ざすとされるその衝動の、その心理の、内面を暴露してみせる。彼は、隠れた内面を暴露してみせる心理学者であることを、つねに自認していた。「そもそも私以前に、哲学者たちのうちの誰が心理学者であったか？ むしろその反対、「高等詐欺師」、「理想主義者」であったのではなかろうか？」とのちに言っている。[6] この彼自身の言葉が、いまこ

Hosei University Repository

こでもあてはまる。もちろん、彼が自認する心理学者とは、現代の心理学のように、実験と観察を実行し、計量的な科学を行なうのではない。あるいはまた、カント以前に行なわれたように、霊魂論を論ずるのでもない。そうではなく、さきにも触れたように彼は、外見に欺かれることなく、そのかぶっている仮面をはいで、その「見えていない所を見抜く」(7)、といった意味での心理学を実行する。表面の仮面をはぎ、現象の根底にある心理を、生理を、本能を、暴露的にあばき出す。これが、彼の心理学である。そしてここでもすでに、彼はその手法によって、真理への衝動の外見上の「誠実さ」、「純粋さ」の、その内面を抉り出している。さらに、こうも言われている。「人間は真理に対して、生を保持する快適な諸結果を求めている。結果を生まない純粋な認識に対しては、人間は無関心であり、おそらく有害で破壊的でもあるような諸真理に対しては、敵意をさえ抱きかねない。」(S.372) こうした彼の分析は、真理を希求する誠実さ、純粋さといったもののヴェールをはがす。それは本来決して、単純に誠実なのでも、純粋なのでもない。個体の生の保存に起因する内容をもっているのであり、むしろそれは、諸々の偽装の結果である。諸々の欺瞞、虚偽、不誠実、不純なる意図、等々の結果である。真理への衝動といってもそれは結局、生の保持に快適な諸結果を生むような社会的含意、締結された平和条約、偽装された慣習、確固とした因襲 (die festen Conventionen) (S.371)、といったものを目ざすことに由来しているのではないか。ニーチェはこのように個体の生の保存の根源から、真理を目ざす衝動の誠実さ、純粋さ、と言われるものの内容をあばき出す。ただ、いま見た真理への衝動の獲得の経緯についての彼の説明には、多分に、道徳の成立についてと同一に近い解釈が見うけられる。いま扱っている論文の表題が、『道徳以外の意味における真理と虚偽について』であるにもかかわらずである。そのためこうした解釈で、真理と称されるものすべてについて、説明が可能だろうか。その点は、ある意味でこの解釈の延長上にある「権力への意志」の思想の場合についても、言えるのではなかろうか。

四

Hosei University Repository

その点の検討はのちに触れるとして、次には、真理あるいは認識と関連して、言語ないし言葉について述べられている。言葉による表現については、ニーチェは生涯自信をもっており、のちに彼はこう言っている。「私以前には、ひとはドイツ語でもって何が可能であるかを、そもそも言葉でもって何が可能であるかを、知らなかった。」(8) しかしその彼の、言語そのものについての考えは、彼の著作中に散見されるのが、まとまって論じられてはいない。いま取りあげている遺稿中のこの部分が、それをややまとめて論じている重要な個所とも言える。しかし、この個所での彼の考えは、「言語において、真理とか妥当な表現などというものは決して問題となっていない」(S. 373)、と言語への強い懐疑、深い不信感が表明されている。

言語とは何か。それは、音で表わされた神経の刺激の複写である、とニーチェは言う。(S. 372) しかし、その神経の刺激から発して、われわれ人間の外にある或る何らかの原因へと推論を進めるのは、すでに根拠の原理の誤った不当な適用の結果である。言葉は決して、人間の外の或る何らかの原因そのままの妥当な表現などではない。なぜなら、言葉は、それを作る人間に対する事物の関係を表示しているだけであって、しかもその関係を表現するのに、きわめて大胆な隠喩 (Metapher) が、つまり「跳び越し」が、援用されている。すなわち、一つの神経の刺激がまず形象 (Bild) に移される場合に、第一の隠喩が援用される。そして、この形象がさらに音に模造される場合に、第二の隠喩が援用される。これらの隠喩ではそのたびごとに、全く別種の新しい領域の真只中への、それぞれの領域の完全な跳び越しが、行なわれる。だから、われわれは樹木とか、色彩とか、雪とか、花とかについて語る場合、そうした事物そのものについて何事かを知っていると信じているが、しかしわれわれが所有しているのは、根源的本質とは徹頭徹尾一致しないところの、事物の隠喩以外の何ものでもない。いずれにせよ、言葉の成立に際しては、物事は論理的に運んではいない。だから哲学者たちは、こうした言語を全材料として用いて、真理を目ざして仕事をし、体系を築きあげるが、言語はそうしたものだから、事物の本質から由来したものとは言えない。(S. 372-373) 言語についてニーチェはこのように、二つの段階での大胆な跳び越し、つまり隠喩によって、成立しているものであると見る。このためそれは、事物の隠喩以外の何ものでもなく、事物に対する人間の関係の表示に

Hosei University Repository

すぎないのであって、事物の本質をそのままに表現しているものなどではないことを、強調する。

ところで彼はさらに、この二つの段階での隠喩、すなわち直観と概念とのそれについて、次のようにもう少し詳細に論じている。すなわち、まず第一の直観の隠喩は、もともとは溶岩のような流れとして人間の想像力(Phantasie)という根源能力から流出してきた形象のかたまりである。(S.377) 神経の刺激が形象に移されるこの「直観の隠喩は、どれもみな個別内で、他に似たものをもたないので、いつもあらゆる分類の網からもれてしまう。」(S.376) つまり第一点として、直観の隠喩は、個別的な現実的なもの (S.374) を、一回限りの徹底して個別化された根源体験 (S.373) を、厳密に考えれば断じて等しくない全く不同の事例 (S.373f) を、より近く表現しているものと解されている。しかしまた他方で、神経の刺激とそれによって産み出された形象との関係が、すでにそれ自体として、何ら必然的な関係ではない。(S.378) 同じ形象が何百万回も産み出され、幾世代も受け継がれ、最後に全人類に同じ動機の結果としてたち現われるとしたら、それはついに、人間にとって同一の意義を獲得し、まるで唯一の必然的な形象であるかのように見なされる。また、もとの神経の刺激とそれによって産み出された形象との関係が、まるで厳密な因果関係であるかのように見なされる。がしかし、直観的隠喩がいくらこのように固定され凝結されたとしても、この隠喩が必然性をそなえ専一的な正当性をもっている、と保証することには全くならない。(ibid.) 概念の母である直観の隠喩は、神経の刺激を芸術的に形象に移す錯覚(Illusion)である。(S.376) このように第二点として、直観の形象がすでに隠喩であって、事物そのものなどではないこと、むしろ錯覚でさえあることが、強調される。

では次に、概念はどのように形成されるのか。「概念はすべて、等しくないものの等置によって成立する。」(S.374) つまり、一回限りの徹底して個別化された根源体験こそ、概念を音で表わしたそれぞれの言語の成立の母体だが、しかしその言語は、こうした体験の記憶の役を果たさせようとして成立しているのではない。そうではなく、多少とも似ている無数の事例に、すなわち厳密に考えれば断じて等しくない全く不同の事例に、当てはまらなくてはならないものとして、成立している。(S.373-374) したがって概念においては、一回限りの徹底して個別化され

Hosei University Repository

た根源体験は、厳密に考えれば断じて等しくない全く不同の事例は、こぼれ落ちてしまっている。このことをニーチェは、「木の葉」(Blatt) を例に述べている。(S.374) すなわち、一枚の木の葉が他の一枚の木の葉と全く同じといったことは断じてない、ということは確実である。同様に確実なことだが、木の葉という概念は、こうした個別的な諸々の差異を任意に棄て去ることによって、つまり相異点を忘却することによって、形成されたものである。すなわち彼は、絶対に個別的な事例という点からすれば、概念はその絶対的な個別性を、他との絶対的な相異を、棄却してしまっているとする。しかし、それだけではない。いったん「木の葉」という概念が形成されると、この概念は、自然の中にはさまざまな木の葉のほかに、まさに「木の葉」そのものとでも言えるようなものが、つまり例えば一つの原型が、存在しているかのような考えを呼びさます。そしてすべての木の葉が、この原型に則って織られ、描かれ、測られ、彩色され、縮らされ、塗られるが、しかし下手な手でそれがなされる結果、どの一葉の見本も、原型の忠実な描写としては正確ではないし、信頼するに耐えないものに終っている、といったように見なされる。すなわち彼によれば、概念が形成されることによって、すべての絶対に個別的な事例に対して一つの原型が、一つの原因が、存在しているかのような考えを呼びさます。がまさに存在していると前提されるこの原型、概念こそ、すべての絶対に個別的な事例の捨象であって、抽象にすぎない。「個別的な現実的なものを看過することによって、われわれに概念が、それにまた形式が、与えられる。これに対して自然は、いかなる形式も、いかなる概念も、それゆえまたいかなる種属も、知らない。自然が知っているのは、ただ、われわれにとっては近づき難い定義しえないXだけである。」(ibid.)

ニーチェはさらに、さきの真理への衝動でも問題となった「誠実さ」(Ehrlichkeit) の概念について述べている。(ibid.) われわれが知っているのは、多数の個別化された諸行動、したがって等しからざる諸行動のみである。しかしわれわれは、その等しからざるものを棄却することによって等置し、ある人間を誠実だと言ったりする。しかもさらに、その人間が今日あのように誠実に振舞ったのは、彼の誠実さのためだ、と言ったりする。これはしかしまたしても、「木の葉」そのものがさまざまな木の葉の原因である、というのと同じである。われわれは、誠実さ

Hosei University Repository

と呼ばれるような本質的な一性質については、全く何も知らない。われわれが知っているのは、多数の個別化された諸行動でしかないのに、それらから一つの「隠れた特性」(qualitas occulta) を定式化して、それに「誠実さ」という名称を付与し、しかもこの誠実さの原型こそが存在して原因となっている、といったように考えられる。

このようにニーチェは概念の形成に関して述べ、それと関連してとくに、概念における絶対的な個別性の棄却、また、概念で固定されたそのもの自体とでも言えるものの存在や原因の想定、に触れている。これらの点が注目されるが、しかしここではそれ以上は展開されていない。そこで彼はさらに、概念に関してこう述べている。すなわち、人間を動物に対して際立たせているすべての点は、直観的隠喩を一つの図式 (Schema) へと昇華させる能力に、つまり、形象を一つの概念へと解消させる能力に、かかっている。そしてこの図式の領野において、最初の直観的な印象のもとではうまくいきそうにもないようなことが、可能になってくる。つまり、階級や等級に従って一つのピラミッド型の秩序を築きあげることが、法律や特権や服従や限界規定などからなる一つの新しい世界を創り出すことが、可能になってくる。この新しい世界は、最初の印象からなる直観的世界に対して、より強固な、より普遍的な、より周知の、より人間的な、それゆえ規制力のある命法的な世界として、現われてくる。(S.375-376) しかもまた、概念という大きな建築物は、ローマの納骨堂のようながっしりした規則正しさを示し、数学の特徴をもなすような厳格さと冷ややかさを、論理において発揮する。(S.376) だから概念は、骰子と同様に骨製で八つの角をもち、置きかえが可能だが、しかしそれはただ、隠喩の残滓として残っているにすぎない。(ibid.)

五

以上のように言語、直観、概念について論じられているが、それではあらためて「真理」とは何か。真理とは、いま言った隠喩の残滓としての概念の骰子遊びの最中に、骰子の目が刻まれている通りに、すべての骰子を使用することである。つまり、骰子の目を精確に読み、正しい分類表を作成し、階級の秩序や位階の序列に決して違反し

Hosei University Repository

ない、ということである。すなわちこうしたものとして、「真理とは、隠喩(Metapher)、換喩(Metonymie)、擬人観(Anthropomorphismus)の動的な一群である。要するに、人間的諸関係の総和である。それが、詩的にかつ修辞的に高められ、転用され、修飾され、そして長く使われたのちに、ある民族にとって確固たるもの、規準的なもの、拘束力のあるもの、と思われるようになったものである。すなわち、真理とは錯覚(Illusion)である。ただそれは、錯覚であることが忘れられてしまった錯覚である。真理とは隠喩である。ただそれは、使い古されて、感覚的に無力になってしまった隠喩である。真理とは貨幣である。ただそれは、その肖像が消えてしまって、いまや金属であってもはや貨幣ではないと見なされるようになった貨幣である。」(S.374-375) このように、隠喩である直観、さらにそれが昇華された隠喩である概念、これらのうえに成立して「真理」と称されているものは、それ自体が隠喩にすぎない、とされる。あるいは換言すれば、錯覚(Illusion)であるとされる。ニーチェはもはや、真理と錯覚との間に、つまり真理と虚偽との間に、区別を設けない。

直観が、概念が、事物の隠喩であって、事物そのものに、事物の本質に、由来しているわけではない。それらが、事物の本質に対応していない、と言うのではない。もしそう言うとすれば、その主張は、独断的な主張であって、反対の「対応している」という主張と同様に、証明不可能だろう。(S.374) 正しい知覚が成立している、つまり、客観が主観において適切な表現を得ている、ということがそもそも矛盾だらけのナンセンスである。「なぜなら、主観と客観との間というような二つの絶対に相異なる領域の間には、いかなる因果性も、いかなる正しさも、いかなる表現もありはせず、せいぜい、美的な関係があるにすぎない。という意味は、全く異質な言葉への暗示的な転移が、吃りながらの翻訳が、あるにすぎない。しかし、それをなすためにもいずれにせよ、自由に詩作し自由に虚構をなす中間領域と媒体力とを、必要とする。」(S.378) 認識における事物の本質との対応、主観における客観との対応、といったことは否定される。直観による形象の形成が芸術的な(S.376, S.380) 隠喩の形成であり、そもそも人間の主観が芸術的に創造する主観(künstlerisch schaffendes Subjekt)(S.377) である、というだけではない。主観と客観との間の対応、といったことは独断的な主張であり、仮定にすぎないのであって、その両者の間に

Hosei University Repository

は美的な（ästhetisch）関係があるにすぎない、とされる。

そうした主観、および主観と客観との関係において、真理とは結局、いわば主体としての人間の姿に型どられたものである。「真理は、徹頭徹尾人間の姿に型どった（anthropomorphisch）ものであって、人間を度外視して「真理それ自体」であるような点を、現実的で普遍妥当的であるような点を、ただの一点さえも含んではいない。このような真理の探究者は、根本においてはただ、人間の姿に世界を変形することを求めているだけである。彼は、世界を人間的な種類の事物として理解しようと奮闘しているのであり、しかもどんなに奮闘しようともせいぜい、同化の感情を勝ちとるだけである。……彼は全世界を、人間に結びついたものとして、人間という一つの根源的音響の無限に砕け散った反響として、人間という一つの根源的形象の幾重にも分かれた模写として、考察している。人間を尺度として万物にあてがうのが、彼のやり方である。」（S.377）ここでは、真理は徹頭徹尾人間の姿に型どったものとされるが、ただニーチェのこの考えは、カントの認識論上の主観主義と決して同列ではない。カントにおいても、学的認識は、主観のもつア・プリオリな形式が客観のうちへと置き入れられ、それを構成することによって、成立する。すなわち、感性のア・プリオリな形式である空間と時間を通じて、直観の多様性が受けとられ、それがさらに悟性のア・プリオリな形式である範疇に基づいて、概念にまで綜合的に統一されることによって、学的認識が成立する。つまりいわば、主観としての人間の姿に型どられたものとして、学的認識は成立する。この点で、表面的にはカントはいま見たニーチェの考えと近く見えるが、しかし内容的には決定的に異なる。ニーチェ自身、こう言っている。「観念論はかつてあまりにもしばしば、自然法則の永遠の首尾一貫性や遍在性や不可謬性を非常にはっきりと確信したが、これまでのような考察に練達している人間は誰でも、そうした種類のあらゆる観念論に対して、疑いもなく深い不信の念を抱いた。」（S.379）すなわち、これまで見た彼の考察からすれば、まず第一に、カントにおいて感性や悟性やそれらのア・プリオリを形式等々といった形で、そのもの自体として固定されるものが、それぞれ一つの抽象されて固定された隠喩、つまり、錯覚にすぎないだろう。また第二に、カントは幾何学的認識と物理学的認識とを学的認識の事実として前提し、そのうえで、それらの成立の条件を追究した。しかしニー

Hosei University Repository

チェからすれば、自然法則の認識にしてからが、直観的「隠喩を土台にした、時間や空間や数の諸関係の模倣」(S.380)にほかならない。どうしてカントのように、現象についてして唯一の絶対的な不変の学的認識が成立している、などという信仰が必要なのか。結局のところ自然法則の認識にしても、生の保存に起因し、生の保持に快適な諸結果を生むように固定された因襲、偽装された慣習、そうしたものとしての隠喩、錯覚、虚偽、ということになろう。

ニーチェは以上のように、認識の「遠近法」(Perspektive)という言葉はいまだ用いていないにしても、すでに、あらゆる真理を相対化し、真理と虚偽との間に区別を設けず、すべてのものが偽装であり、隠喩であり、錯覚であり、虚偽である、という見解に達している。こうして彼はすでに、真偽の彼岸に立っている。唯一の絶対的な不変の認識、といったものは否定される。それは、そうしたものとして凝結され固定された虚偽にほかならないものであることが、暴かれる。ニーチェは、ゲーテの生と芸術とが示したような成熟を拒まれた人間、円熟を拒まれた人間で、ある意味でその思想は初期においてほとんど出揃っていた、とする見方があるが、確かに、これまで検討してきた彼の思索についても、そのことが言える。

これまで見てきた真理についてのニーチェの見解は、権威あるものと見なされてきた真理の価値を、引きずり落す。真理の不動性、不変性に対して動揺を与え、われわれの認識が生のそのつどの立場との関係のものである、という見解に導く。カントにおいて不変不動の認識と見なされたユークリッド幾何学とニュートン物理学はともに、その後ある意味で克服されざるをえなかった。認識の問題についてのそうした経緯の背後では、たとえ間接的であったにしても、このニーチェ的見解の出現も一つの意義をもつと言える。ただしかし彼はいまの場合、知性の本質を、認識の本質を、生の保存という根源から解釈する。そしてその結果、真理とは偽装された慣習である、確固とした因襲であるといったように、道徳の成立についてと同一に近い解釈が、真理についても見うけられる。あるいは、ここではそうした解釈以上に出ていない。(S.371, S.372, S.375)がこうした解釈で、真理と称されるものすべてについて、説明が可能だろうか。その点は、ある意味でここでの解釈の延長上にある「権力への意志」の思想

Hosei University Repository

の場合についても、言えるのではなかろうか。この点をも含めて、次に「権力への意志」との関わりにおいて、ニーチェの真理についての思索に検討を加えてみたい。

注

(1) Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, hrsg. v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari (Walter de Gruyter) (以下KGWと略す), V_2, S. 158–159.

(2) KGW, VI_2, S. 9.

(3) KGW, III_1, S. 8.

(4) KGW, III_2 の頁数を指す。以下本文中に直接あげるのは、この巻の頁数である。

(5) KGW, VI_2, S. 53–54.

(6) KGW, VI_3, S. 369.

(7) KGW, VI_3, S. 264.

(8) KGW, VI_3, S. 302.